新版　まえがき

本書は、基本的に言語学の研究書であるが、これまでの一般的な言語学の研究とは異なり、人間の認知能力のなかでも重要な役割をになう推論の認知プロセスがかかわる言語現象を考察の対象としている。推論と日常言語のメカニズムの解明は、筆者のこれまでの言語学の研究の重要なテーマの一つであるが、本書は、筆者のこの方面における研究の出発点となる一冊である。推論がかかわる言語現象の研究は、その後、拙著の『認知意味論研究』（研究社、2012）、『修辞的表現論』（開拓社、2015）、『自然論理と日常言語』（ひつじ書房、2016）で試みているが、本書は、これらの研究を進めていく際の背景的な基盤になっている。

初版の刊行から現在まですでに二十数年が過ぎており、ここ十年余りの間、本書は絶版となっていた。その間、理論言語学、語法研究、テクスト・談話分析、言語情報処理、等の関連分野の多くの方々から、再版のリクエストをいただいていたが、ようやくここに新版の刊行が可能となった。新版に際しては、本書の初版の刊行から現在までの照応現象に関する新たな知見と研究成果を、巻末の最終章（「照応研究の新展開—認知的パースペクティヴ」）として追加している。この四半世紀における言語学の研究、とくに認知言語学のアプローチに基づく言語学の研究には、注目すべき進展がみられる。この新版では、追加の最終章において、認知言語学の枠組みに基づく照応現象の注目すべき研究を概観している。

これまでの言語学の研究（とくに形式文法のアプローチに基づく言語学の研究）では、照応がかかわる文法現象には、人間の認知能力の中核をなす推論の認知プロセスは関与せず、純粋に文法の統語的な制約に基づいて記述・説明が可能であるという前提で研究が進められている。本書では、

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

照応がかかわる具体的な言語現象の綿密な分析を通して、形式文法における統語論の自律性を前提とする言語学のアプローチの限界を明らかにしている。とくに本書では、統語論の自律性に基づく言語研究の限界を示す証拠として、演繹的推論、デフォールト的推論、誘引的推論、会話の含意にかかわる語用論的推論を考慮しないかぎり、記述・説明の一般化が不可能な言語事実を、音韻・形態レベル、統語レベル、意味レベル、語用論レベルにわたって指摘している。この種の推論にかかわる事実は、言語学の研究だけでなく、思考のメカニズムにかかわる論理学、心のメカニズムの解明をめざす心理学、等の認知科学の関連分野にも重要な知見を提供する。また本書では、日常言語の修辞性にかかわる認知プロセスが照応現象の記述・説明に際し重要な役割をになう事実を、メタファー、メトニミー、等の言語現象との関連で考察している。この種の事実の探求は、修辞学、詩学、文学、等の言葉の創造性のメカニズムの解明をめざす人文科学の関連分野に重要な知見を提供する。

旧版の「まえがき」でも触れているが、本書では作例だけでなく、日常会話、文学作品（小説、戯曲、随筆、等）の古典的なテクストからの多様な引用例に基づいて考察を進めている。本書で引用している文学作品の大半は、学部と大学院の学生時代から現在にいたるまでに味読した作品の引用例のノートに基づいている。国内外を問わず、これまでの理論言語学の研究は、（とくに形式文法の研究にみられるように）作例を中心に分析を進める傾向がある。言語学の研究が、言葉の形式と意味の知的側面の探求だけでなく、その感性的な側面、創造的（ないしは想像的）な側面の探求に進展していくためには、文学性、芸術性を反映する言語表現の分析が重要な役割をになう。本書の文学作品の引用例に関する分析が、言葉の感性、創造性／想像性のメカニズムの研究に、何らかのかたちで貢献することを願っている。

本書の新版の刊行に際しては、企画、編集、校正、等の作業においてくろしお出版の池上達昭氏にお世話になった。心よりお礼を申し上げたい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

最後に、精神面だけでなく研究と生活のあらゆる面において、つねに励まし支えてくれる家族に感謝したい。

2017 年 10 月 11 日　吉日

山梨正明

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

まえがき iii
新版まえがき vi

推論と照応

1　序　章 3
1.1　はじめに　3
1.2　照応の基本的側面　4
1.3　照応の認定—解釈の間接モード　9
1.4　推論と間接照応　10
1.5　照応の表示と解釈　11

2　語用論的推論と照応現象 13
2.1　はじめに　13
2.2　語用論と推論　14
2.3　疑似論理性と間接照応　18
2.4　複合的推論と間接照応　22
2.5　言語外的知識と推論照応　26

3　談話・テクストの主観性と照応 29
3.1　はじめに　29
3.2　モダリティと照応　29
3.3　テンス・アスペクトと照応　34
3.4　ヴォイス・否定と照応　36

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3.5　モダリティと推論照応　39
3.6　遂行的照応—モダリティと発話行為　41
3.7　発話の力と間接照応　43

4　間接照応と認知プロセス 47
4.1　はじめに　47
4.2　オンライン・プロセスと統合的照応　48
4.3　補完リンクと間接照応　52
4.4　先行詞の存在モードと間接照応　58
4.5　ゼロ先行詞と間接照応　60
4.6　分離先行詞と間接照応　63
4.7　照応不能領域と内在先行詞　68

5　レトリックと照応現象 75
5.1　はじめに　75
5.2　メトニミーと日常言語　75
5.3　トポニミーとパートニミー　76
5.4　メタファーと照応　88
5.5　ゼロ照応とレトリック　97
5.6　コソアの拡張と照応関係　107

6　終　章 113
6.1　言語学と関連分野の照応研究　113
6.2　照応現象と言語研究　114
6.3　文法と推論の役割　115
6.4　照応と解釈の不確定性　117
6.5　照応の理解と汎モジュール性　118

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

照応研究の新展開
—認知的パースペクティヴ—

1.　はじめに 123
2.　一般的認知能力と言葉の創発性 123
3.　参照点起動の推論能力 125
4.　参照点能力と照応現象 126
5.　間接照応と参照点モデル 134
6.　メトニミー照応と連想のプロセス 142
7.　プロファイル・シフトと間接照応 145
8.　テクスト・レベルのオンライン照応 148
9.　話題のシフトとテクスト・レベルの照応 154
10.　結語と展望 160

参考文献 163
索引 174
著者紹介 179

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

1　序　章

1.1　はじめに

日常言語の談話、テクストの理解のプロセスは、さまざまな認知のメカニズムによって特徴づけられている。そのなかでも、照応は、日常言語の談話やテクストの形式的なつながりや意味的なつながりを理解していくための重要な言語手段の一つとして注目される。

一般に、照応の現象は、言語学の分野を中心に研究が進められてきているが、心と情報処理のプロセスの研究を中心とする認知心理学や自然言語処理などのいわゆる認知科学の関連分野においても、重要な研究のターゲットとして注目されてきている。

照応現象へのアプローチは、それぞれの分野によって異なる。認知心理学の分野では、とくに記憶、連想などのメカニズムを理解していくための検証の一つの手段として、照応現象を研究のターゲットにしている。また、情報処理の分野では、時間軸にそった談話、テクストの理解のプロセスの一面を明らかにしていくための検証の場としてこの現象に注目する。

これらの分野では、照応現象の意味と形式にかかわる言語的な知識の側面に注目するというより、この種の知識の背後にある人間の認識のメカニズムの解明に力点がおかれている。これにたいし、言語学の分野では、とくに形式と意味の体系からなる記号系としての言葉の側面ないしは文法的な知識の側面にかかわる現象の一部として、照応現象が研究のターゲットとされてきている。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

2　語用論的推論と照応現象

2.1　はじめに

日常言語の理解は、柔軟な情報処理のプロセスからなり立っている。言葉の伝達にかかわる情報は多様である。この種の情報のなかには、そこに表現された言葉の文字通りの意味にかかわる情報だけでなく、その表現の前後関係にかかわる文脈情報、伝達の場面にかかわる情報、さらに論理的な推論や言語外の知識を背景とする語用論的な推論によって誘引される情報もふくまれる。

日常言語の理解は、このようなさまざまな情報に基づく柔軟な情報処理のプロセスによって特徴づけられているが、これらの要因のなかでも、推論はこの柔軟な情報処理を可能とする重要な要因の一つである。

推論を介して誘引される情報は、かならずしもわれわれが直接に意識しているとはかぎらない。この種の情報の一部は潜在的に存在している。われわれは、言語レベルにあらわれている情報だけでなく、文脈や推論によって誘引されるこの種の潜在的な情報もくみ取りながら柔軟な伝達をおこなっている。

このように日常言語の理解には文脈や推論による伝達がかかわっているが、この種の伝達のメカニズムを特徴づける推論と潜在的な文脈から誘引される含意の研究は本格的にはなされていない。

本章では、柔軟な伝達を可能としている推論の問題を、照応現象との関連でみていくことにする。一般に照応現象を問題にする場合には、問題の照応表現の先行詞が言語レベルにおいて直接的に理解できる照応の問題が

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3　談話・テクストの主観性と照応

3.1　はじめに

一般に、照応関係を理解していく場合、状況や場面などの言語外の情報にも注目するが、まず問題の照応の前後関係を特徴づけている言語表現の形式的な手がかりや問題の照応にかかわる言語文脈に注目する。しかし、照応の理解の手がかりになると思われる言語形式や言語文脈それ自体の理解も、文の基本的な意味内容を特徴づける修飾表現やテンス、アスペクトさらには命題にたいする話し手や書き手の主観的な態度を反映するモダリティの要因によって左右される。

したがって、一見したところ照応の先行文脈が明示されているようにみえる文でも、文の基本的な意味内容とテンス、アスペクト、モダリティ、等の要因の相互関係を考慮しないかぎり、問題の先行詞の認定が適切に規定できない例も広範に存在する。この種の要因は、語用論的な推論がかかわる間接照応の問題にも密接にかかわっている。

本章では、とくに語用論的な推論と話し手や書き手の主観的な態度を反映するモダリティ、テンス、アスペクトの要因がかかわる照応の問題を考察していく。

3.2　モダリティと照応

まず、モダリティが照応にかかわる例として、次の対話を考えてみよう。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4　間接照応と認知プロセス

4.1　はじめに

日常生活の伝達は、しかるべき文脈や状況との関連で直観的になされるのが普通であり、個々の言語表現のつながりの一語一句を意識的に理解しながら伝達をはかっていくわけではない。この点は、照応表現の理解にもあてはまる。日常の伝達の場では、問題の照応表現の先行詞が、どのような形で存在しどのような言語的ないしは言語外の手がかりによって一語一句が理解されるかを意識しながら意志疎通をはかってはいない。しかし、実際に先行詞の存在のモード、先行詞の認知プロセスとの関連で照応の理解を考えた場合には、問題の照応関係は想像する以上に複雑である。

一般に、照応にかかわる先行詞は、先行文脈になんらかの形で静的に存在しているという暗黙の前提がある。しかし場合によっては、先行文脈の展開のしかたに応じて先行詞の意味内容がダイナミックに変化し、この変化を考慮しないかぎり問題の照応関係が適切に理解できない例も存在する。ある場合には、先行詞に相当する部分が省略されており、この省略部分を復元することによって間接的に照応関係が理解される場合も考えられる。また照応によっては、先行詞は前後の言語的な文脈には存在せず、その文ないしはテクスト・談話にかかわる一般的な知識との関連で先行詞に相当する要素が理解される場合も考えられる。

この種の照応は、問題の照応表現と先行詞の関係が前後の言語文脈から直接的には理解されないという点で、いずれも間接照応の一種とみなされる。このタイプの照応の理解には、推論や連想にかかわるさまざまな認知

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

5　レトリックと照応現象

5.1　はじめに

一般に照応表現は、文字通りの意味を表現する文やテクスト・談話のなかで用いられるものと考えられる。この事情から、照応の研究では文字通りの表現を研究のターゲットとするのが普通であり、イディオムやメタファー、メトニミー、等の言葉のあやがかかわる言語表現と照応の関係は検討されていない。とくに文法を中心とする言語研究においては、メタファー、メトニミーなどがかかわる言語現象は、レトリックの研究として、いわゆる文法の研究からは区別される。このような文法とレトリックの区分の背景には、文字通りの言葉の用法と修辞的な言葉のあやにかかわる用法が最初から区別されるという暗黙の前提がある。

しかし日常言語の実際の用法をみた場合、いわゆる文字通りの言葉の用法が他の用法から厳密に区別されるわけではない。日常言語の基本的な用法のなかに、すでにイディオム、メタファー、等のさまざまな言葉のあやがかかわっており、創造的で柔軟な伝達のささえになっている。この種の言葉のあやは、照応現象のなかにもみられる。本章では、とくにメタファー、メトニミー、イディオム、等がかかわる照応現象と推論の問題を考察していく。

5.2　メトニミーと日常言語

日常の伝達には現実的な制約があるが、その反面、伝達の背景としての

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

6　終　章

6.1　言語学と関連分野の照応研究

言葉の理解は、人間の認知のプロセスを反映している。そのなかでも、照応の理解は、思考・推論・連想、等にかかわる人間の多様な認知のプロセスを反映する言語現象の一つとして注目される。照応現象は、とくに言語的な事実によって、人間の認知プロセスの諸相を解明していく際の重要な手がかりをあたえてくれる。

照応現象は、言語学の分野を中心に研究が進められてきているが、心のメカニズムや情報処理のプロセスの研究を中心とする認知心理学、自然言語処理に代表される認知科学の関連分野においても、重要な研究のターゲットとして注目されている。

この現象へのアプローチは、それぞれの分野によって異なる。認知心理学の分野では、とくに記憶、連想などのメカニズムを理解していくための検証の一つの手段として、照応現象を研究のターゲットにしている。[1] また、情報処理の分野では、時間軸にそった談話・テクストの理解のプロセスの一面を明らかにしていくための検証の場として照応現象に注目する。[2]

---

[1] 認知心理学の分野における照応の研究に関しては、Brown and Yule（1983：7 章）、Garrod and Sanford（1982）、Haviland and Clark（1974）、Sanford and Garrod（1981）、米沢（1990）、等を参照。

[2] 言語理解の研究を中心とする情報処理の分野における照応の研究に関しては、Grishman（1986）、Norman and Rumelhart（1975：1 章）、Webber（1978）、石崎・井佐原（1984）、桃内（1991）、田中（1979）、田中・元吉・山梨（1983）、等を参照。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

照応研究の新展開

―認知的パースペクティヴ―

1.　はじめに

本書の初版の刊行から現在までの照応現象に関する研究、特に認知言語学の枠組みに基づく照応現象の研究には、理論面と実証面の双方において、いくつかの注目すべき研究の進展がみられる。以下では、この方面の研究におけるこれまでの照応分析の重要な研究を考察するが、その前に認知言語学の基本的な言語観を確認しておきたい。

認知言語学は、人間の一般的な認知能力にかかわる要因を言語現象の記述・説明の基盤とするアプローチをとる。このアプローチをとることにより、言葉の背後に存在する言語主体の認知能力との関連で言語現象を包括的に捉えていく新たな方向が見えてくる。認知言語学のパラダイムでは、いわゆる言語能力は、一般的な認知能力によって動機づけられており、言語現象はこの能力の反映として位置づける。換言するならば、いわゆる言語能力はこの種の一般的な認知能力と不可分の関係にあり、後者にかかわる要因を無視して言語能力を規定することは不可能であるという立場に立っている。

2.　一般的認知能力と言葉の創発性

日常言語の表現は、ミクロレベルからマクロレベルに至るどのような表現であれ、主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定される。外部世界の対象や事態は、認知主体としてのわれわれから独立して解釈されるのではなく、主体の投げかける視点との関連でさまざまな意味づけがなされる。また、外部世界の理解には、具体的な解釈のレベルからより抽象的な解釈のレベル（あるいは、特定的な解釈のレベルからより一般的な解釈のレベル）に至るさまざまな認知プロセスがかかわっている。言葉のメカニズムを明らかにしていくためには、ミクロレベルからマクロレベルのどのレベルであれ、言語現象の背後に存在する認知主体のダイナ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers